

---

日本ロシア文学会  
第73回大会資料集

---

2023年10月21日（土）～10月22日（日）  
富山大学

日本ロシア文学会



第73回(2023年度)定例総会・研究発表会は、来たる10月21日(土)、22日(日)の両日、富山大学(五福キャンパス)にて、対面形式で開催されます。ハイフレックス方式は実施いたしませんので、ご了承ください。研究発表会では、21件の個別発表(A, B, C)、1件のワークショップ(W)が設けられます。ふるってご参加ください。

なお、配布資料類はGoogle Driveからダウンロードが可能です。Google Driveのリンクについては、後日ロシア文学会ホームページ(<http://yaar.jpn.org/>)及び、学会員メーリングリストによりご連絡いたします。

ご参加予定の方は、以下のURLまたはQRコードから、Googleフォームのアンケートに入っていたり、10月11日(水)までに参加登録を行ってください(事前登録なしでもご参加は可能ですが、ネームカードの準備、並びに懇親会の大まかな人数把握のため、できるだけアンケートにご協力いただけますと幸いです)。

<https://forms.gle/DV1w8XPABFZFAAJP9>

対面参加事前申込用Google FormのQRコード



日本ロシア文学会 2023年度定例総会・研究発表会(富山大学) タイムテーブル

10月21日(土)				
開会式 09:15-09:25 第1会場(C棟1F C12)				
		第1会場 (C棟1F C12)	第2会場 (C棟1F C13)	第3会場 (A棟2F A21)
研究発表	09:30-10:05	ブロック① A-I	ブロック② C-I	
	10:05-10:40			
	10:40-11:15			
	11:15-11:25	休憩		
	11:25-12:00	ブロック③ A-II	ブロック④ B-I	
	12:00-12:35			
昼食	12:35-13:50	昼食 理事会(第3会場)		
研究発表	13:50-14:25	ブロック⑤ A-III	ブロック⑥ A-IV	ブロック⑦ C-II
	14:25-15:00			
	15:00-15:35			
休憩	15:35-15:45			
大賞受賞記念講演	15:45-16:45	共通教育棟 C棟 2F C21		
定例総会	16:50-18:10	共通教育棟 C棟 2F C21		
懇親会	19:00-21:00	ホテルグランテラス富山		
10月22日(日)				
		第1会場 (C棟1F C12)	第2会場 (C棟1F C13)	第3会場 (A棟2F A21)
研究発表・ワーク ショップ	10:00-10:35	ブロック⑧ A-V	ブロック⑨ W-I (10:00-12:00)	
	10:35-11:10			
	11:10-11:45			
昼食 各種委員会	11:50-13:00			

会場案内 (受付) A棟1F エントランス (控室) C棟1F C11 (書籍等展示) A棟2F A22

## 第1日研究発表 10月21日(土)

第1会場(C棟1F C12)				
ブロック・日時	番号	発表者	題目	司会者
ブロック① 10月21日 9:30-11:15	A01	西角 美咲 NISHIKADO Misaki	旅における人間関係—ルーシ人旅行者によるカトリック教徒への対抗意識と友好感情— Relationships in Travel: Amity and Enmity between Rus' Travelers and Catholics	大西 郁夫 坂庭 淳史
	A02	深瀧 雄太 ФУКАТАКИ Юта	『左利き』における「交換」・「共同体」・「国家」 «Обмен», «сообщество» и «государство» в «Левше»	
	A03	笹山 啓 SASAYAMA Hiroshi	ロシアの右派思想家による国外の思想の読解について On the Reading of Foreign Thoughts by Right-Wing Thinkers in Russia	
ブロック③ 10月21日 11:25-12:35	A04	町田 航大 МАТИДА Кодай	スラヴ問題をめぐるドストエフスキーとホミャコフの対話: 『作家の日記』における詩「鷲」の引喩を例に Диалог Ф.М. Достоевского с А.С. Хомяковым о славянском вопросе: на примере аллюзий к стихотворению «Орел» в «Дневнике писателя»	番場 俊 齋須 直人
	A05	清水 真伍 СИМИДЗУ Синゴ	ドストエフスキーの小説『白痴』における明暗の対立構造の分析 Анализ противоположной структуры света и тени в романе «Идиот» Ф.М. Достоевского	
ブロック⑤ 10月21日 13:50-15:35	A07	栗生田 杏奈 АОУДА Анна	ガルシンの『熊』に見られる熊表象の変容:アニマル・スタディーズの視座からの考察 Трансформация символа медведя в романе Гаршина «Медведи» в контексте исследования животных	越野 剛 中野 幸男
	A08	大谷 梨乃 ОТАНИ Рино	戦争と人物表象—日ソ戦期の樺太を描いた文学作品を例に— Война и образы персонажей (на примере литературных произведений, изображающих Карафуто во время Советско-японской войны)	
	A09	堤 縁華 TSUTSUMI Yorika	ブズブラーグまでの距離:アクラム・アイリスリの創作における出郷と帰郷 How Far Away Is Buzbulag? Leaving and Returning Home in Akram Aylisli's Works	
第2会場(C棟1F C13)				
ブロック・日時	番号	発表者	題目	司会者
ブロック② 10月21日 10:05-11:15	C10	一柳 富美子 ХИТОЦУЯНАГИ Фумико	ロシアに於ける音楽学研究の現在と日本の現状—ラフマーニノフ作品に於ける「Dies irae」引用問題を例に Современное состояние музыковедческих исследований в России и Японии: Пример проблемы цитирования «Dies irae» в произведении С.В.Рахманинова	野中 進 本田 晃子
	C02	鈴木 佑也 SUZUKI Yuya	《ソヴィエト宮殿》建築競技設計(1957)に至るまで:「建築家」としてのニキータ・フルシチョフ The Process of the Architectural Design Competitions “The Palace of the Soviets” (1957): Nikita Khrushchev as an “Architect”	
ブロック④ 10月21日 11:25-12:35	B01	池澤 匠 IKEZAWA Takumi	戦時下ウクライナの SNS におけるウクライナ語・ロシア語に関するメタ言語的言説 Metalinguistic Discourse on Ukrainian and Russian Languages in Ukrainian Social Media under the Ongoing War	中澤 敦夫 堀口 大樹
	A06	塚田 力 ЦУКАДА Цутому	『2023年古正教教会カレンダー(ウクライナ古正教会)』にみる戦時下の古儀式派 Старообрядцы в годы войны в "Древлеправославный христианский (старообрядческий) календарь на 2023 год (украинская древлеправославная церковь)"	

ブロック・日時	番号	発表者	題目	司会者
ブロック⑥ 10月21日 13:50-15:35	B02	ボリソフ・アンナ БОРИСОВА Анна	Хронотоп М. М. Бахтина и его применение в прикладной лингвистике: Хронотопический анализ урока по русскому языку как иностранному	安達 大輔 古宮 路子
	A10	グレチュコ・ヴァレリー ГРЕЧКО Валерий	Путевые очерки В. Шкловского: между приемом и фактографией	
	A11	サフロフ・ユルトゥズ САВРОВА Юлгуз	Геопоэтический символизм городов в историческом романе Зия Самеди "Тайна Годов": Перспектива уйгурского советского писателя	
第3会場(A棟2F A21)				
ブロック・日時	番号	発表者	題目	司会者
ブロック⑦ 10月21日 13:50-15:35	C03	佐藤 大雅 SATO Hiromasa	なぜ「シビア・スタイル」は再評価されているのか? :「シビア・スタイル」の近年の回顧(展)と受容 Why Is the "Severe Style" Reevaluated? Retrospective and Reception of the "Severe Style" in Recent Years	長谷川 章 河村 彩
	C04	松元 晶 MAJUMOTO Акира	「現代性」とは何か: 1960年代中央アジアの宇宙表象 Что означает понятие «современность»? Представление о Космосе в Центральной Азии в 1960 гг.	
	C05	横山 綾香 ЁКОЯМА Аяка	21世紀のリュビーモフと詩:『以前と以後(プリコラージュ)』(2003)を中心に Ю. Любимов XXI века и поэзия: на примере спектакля «До и После (бриколаж)» (2003)	

第9回日本ロシア文学会大賞受賞記念講演

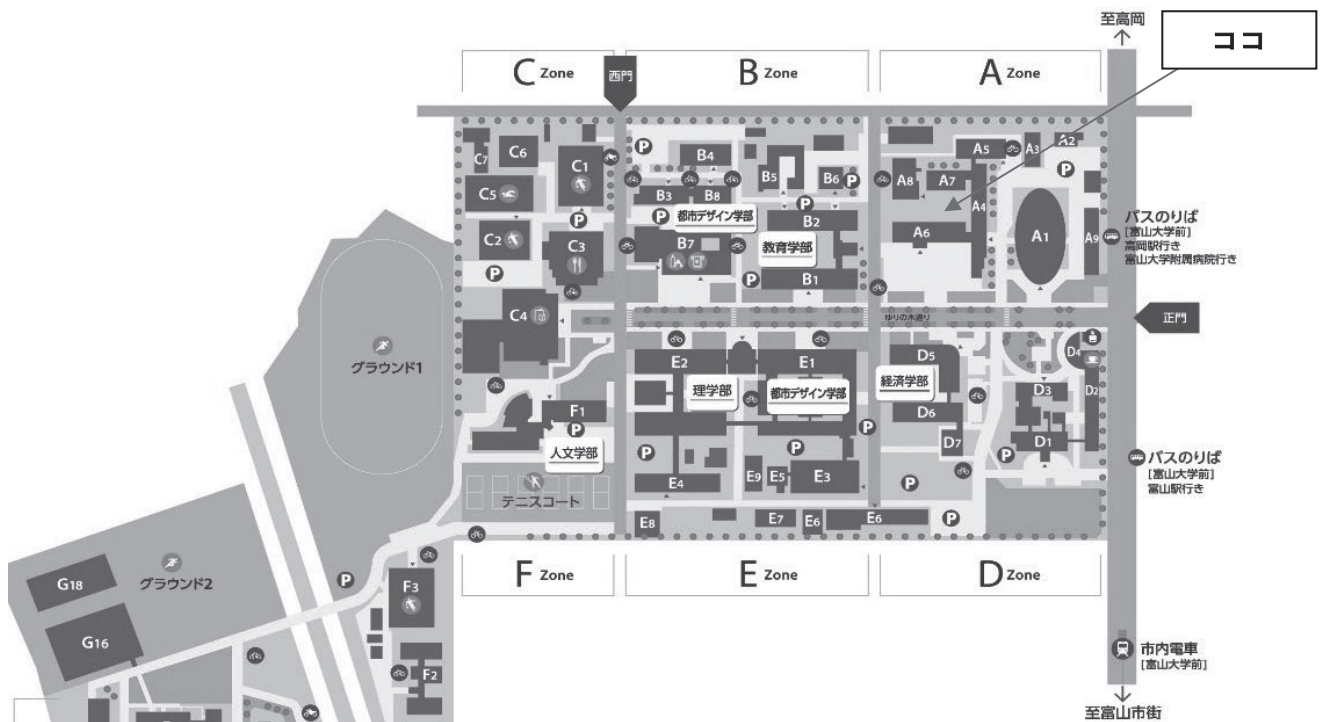
10月21日(土)15:45-16:45 富山大学五福キャンパス共通教育棟C棟2FC21

受賞講演者	講演題目
上田洋子(ロシア文学・演劇研究者、株式会社ゲンロン代表) УЭДА Йоко	インターネットはロシア文化のストリートである—プッシー・ライオットから特別軍事作戦下の愛国的パフォーマンスまで Интернет-пространство как "улица" русского искусства: от Pussy Riot до патриотических перформансов во время СВО

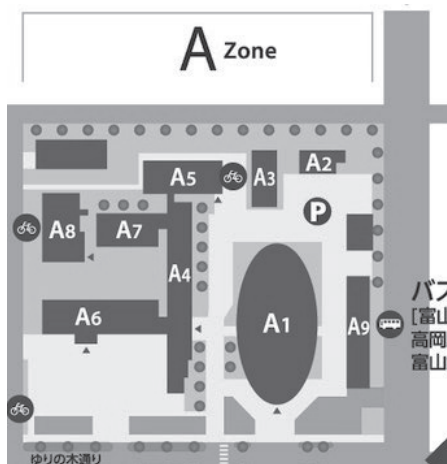
第2日研究発表 10月22日(日)

第1会場(C棟1F C12)				
ブロック・日時	番号	発表者	題目	司会者
ブロック⑧ 10月22日 10:00-11:45	A12	奥村 文音 ОКУМУРА Фуминэ	フレーブニコフの作品における楽器のモチーフ Мотивы музыкальных инструментов у Хлебникова	貝澤 哉 八木 君人
	A13	李 博聞 ЛИ Бовэнь	パステルナーク「ペテルブルク」における4つの空間と「不可抗力」の隠喩 Четыре пространства и метафора «форс-мажор» в тексте «Петербург» Б. Пастернака	
	A14	岩間 成美 ИВАМА Наруми	プロツキイにおける「海」と「目」の象徴性について Символика моря и глаз в поэтике И. Бродского	
第2会場(C棟1F C13)				
ブロック・日時	番号	発表者	題目	司会者
ブロック⑨ 10月22日 10:00-12:00	W01	清沢 紫織 КИЁСАВА Сиори 柚木 かおり ЮНОКИ Каори 渡部 直也 ВАТАБЕ Наоя	ロシア周辺における現在の文化的状況について Современная культурная ситуация в Украине, Беларуси и России	渡部 直也 (コーディネーター)

【会場案内】 富山大学五福キャンパス Aゾーン (A4, A6 : 共通教育棟 A棟および C棟)



A zone 拡大図



- A1. 黒田講堂
- A2. 国際機構 (旧 国際交流センター)
- A3. 多目的施設
- A4. 共通教育棟 (A棟)
- A5. 共通教育棟 (B棟)
- A6. 共通教育棟 (C棟)
- A7. 共通教育棟 (D棟)
- A8. 共通教育棟 (E棟)
- A9. 災害対策プラザ

- ・(市内電車) 富山駅から約20分:  
「富山駅」停留所にて2系統・5系統(大学前方面)に乗車約15分→「富山大学前」停留所下車 徒歩約5分
- ・(バス) 富山駅から約20分:  
富山駅南口バスターミナル3番のりばにて富山地铁・路線バス「富山大学前経由」に乗車約20分→「富山大学前」バス停下車すぐ
- ・(タクシー) JR富山駅から約15分、富山空港から約20分

【宿泊・昼食その他】

- ・宿泊先は各自ご手配ください。
- ・大学周辺には飲食店が大変少ないため、昼食をお取りになる際はコンビニや富山駅近くの飲食店などの利用もご検討ください（学内の食堂・売店につきましては、コンビニエンスストア“Tulip”が土曜11:00-13:30のみ営業予定です）。
- ・外来専用駐車場が手狭のため、自家用車でのご来学はご遠慮ください。
- ・新型コロナウイルス感染症は、令和5年5月8日から「5類感染症」に移行しているため、本大会でもマスクの着用義務などの特別な対策を行う予定はありません。ただし今後、事態に大きな変化があった場合には、学会ホームページ並びに、学会員メールアドレスにて通知いたします。

【会場説明】

〈受付〉A棟1F エントランス

〈控室〉C棟1F C11

〈書籍等展示〉A棟2F A22

〈発表会場〉 第1会場 C棟1F C12：開会式、ブロック①、③、⑤、⑧  
第2会場 C棟1F C13：ブロック②、④、⑥、⑨  
第3会場 A棟2F A21：ブロック⑦

〈大賞受賞記念講演〉C棟2F C21

〈定例総会〉C棟2F C21

【お問い合わせ先】

大会実行委員会 taikai.jikko.2023@gmail.com

懇親会のお知らせ (Банкет)

日時：10月21日(土) 19:00-21:00 (21 октября, сб, 19:00-21:00)

場所：ホテルグランテラス富山4階 瑞雲の間

(Hotel Grand Terrace Toyama 4 F, Banquet Room «ZUIUN»)

〒930-0004 富山県富山市桜橋通り2-28

JR富山駅(南口)より徒歩7分 / 市電「地鉄ビル前」駅より徒歩1分

常勤職(学振PD含む)：8,000円 (для штатных преподавателей-членов ЯАР – 8,000 иен)

非常勤職：5,000円 (для внештатных преподавателей-членов ЯАР – 5,000 иен)

大学院生：5,000円 (для аспирантов-членов ЯАР – 5,000 иен)

国外参加非会員：5,000円 (для зарубежных участников конференции – не членов ЯАР – 5,000 иен включая регистрационный взнос)

支払い：当日受付にて・参加費込み (Способ оплаты: на стойке регистрации, наличный расчет)

☆ご出欠のお知らせを10月11日(水)までにGoogleフォームのアンケートにてご回答ください(本資料集1ページ参照)。

# 日本ロシア文学会第73回研究発表会 報告要旨集

- 
- |     |   |   |
|-----|---|---|
| A01 | 西角 美咲                                     | 旅における人間関係—ルーシ人旅行者によるカトリック教徒への対抗意識と友好感情—   |
| A02 | 深瀧 雄太                                     | 『左利き』における「交換」・「共同体」・「国家」  |
| A03 | 笹山 啓                                      | ロシアの右派思想家による国外の思想の読解について  |
| A04 | 町田 航大                                     | スラヴ問題をめぐるドストエフスキーとホミヤコフの対話：『作家の日記』における詩「鷲」の引喩を例に  |
| A05 | 清水 真伍                                     | ドストエフスキーの小説『白痴』における明暗の対立構造の分析   |
| A06 | 塚田 力                                      | 『2023年古正教教会カレンダー（ウクライナ古正教会）』にみる戦時下の古儀式派   |
| A07 | 栗生田 杏奈                                    | ガルシンの『熊』に見られる熊表象の変容：アニマル・スタディーズの視座からの考察   |
| A08 | 大谷 梨乃                                     | 戦争と人物表象—日ソ戦期の樺太を描いた文学作品を例に—   |
| A09 | 堤 縁華                                      | ブズブラグまでの距離：アクラム・アイリスリの創作における出郷と帰郷   |
| A10 | ГРЕЧКО Валерий                            | Путевые очерки В. Шкловского: между приемом и фактографией  |
| A11 | САВРОВА Юлгуз                             | Геополитический символизм городов в историческом романе Зия Самеди "Тайна Годов":<br>Перспектива уйгурского советского писателя   |
| A12 | 奥村 文音                                     | フレーブニコフの作品における楽器のモチーフ   |
| A13 | 李 博聞                                      | パステルナーク「ペテルブルク」における4つの空間と「不可抗力」の隠喩  |
| A14 | 岩間 成美                                     | ブロッキイにおける「海」と「目」の象徴性について  |
| B01 | 池澤 匠                                      | 戦時下ウクライナのSNSにおけるウクライナ語・ロシア語に関するメタ言語的言説  |
| B02 | БОРИСОВА Анна                             | Хронотоп М. М. Бахтина и его применение в прикладной лингвистике: Хронотопический анализ урока по русскому языку как иностранному |
| C01 | 一柳 富美子                                    | ロシアに於ける音楽学研究の現在と日本の現状—ラフマーニノフ作品に於ける「Dies irae」引用問題を例に   |
| C02 | 鈴木 佑也                                     | 《ソヴィエト宮殿》建築競技設計（1957）に至るまで：「建築家」としてのニキータ・フルシチョフ   |
| C03 | 佐藤 大雅                                     | なぜ「シビア・スタイル」は再評価されているのか？：「シビア・スタイル」の近年の回顧（展）と受容   |
| C04 | 松元 晶                                      | 「現代性」とは何か：1960年代中央アジアの宇宙表象  |
| C05 | 横山 綾香                                     | 21世紀のリュビーモフと詩：『以前と以後（ブリコラージュ）』（2003）を中心に  |
| W01 | ロシア周辺における現在の文化的状況について（清沢 紫織、柚木 かおり、渡部 直也） |   |
- 

日本ロシア文学会

2023年10月



## Abstracts of Research Papers Accepted for the 73rd Annual Assembly of the Japan Association for the Study of Russian Language and Literature

- 
- |     |  |   |
|-----|--|---|
| A01 | NISHIKADO Misaki   | Relationships in Travel: Amity and Enmity between Rus' Travelers and Catholics  |
| A02 | ФУКАТАКИ Юта   | «Обмен», «сообщество» и «государство» в «Левше»   |
| A03 | SASAYAMA Hiroshi   | On the Reading of Foreign Thoughts by Right-Wing Thinkers in Russia   |
| A04 | МАТИДА Кодай   | Диалог Ф.М. Достоевского с А.С. Хомяковым о славянском вопросе: на примере аллюзий к стихотворению «Орел» в «Дневнике писателя»                 |
| A05 | СИМИДЗУ Синго  | Анализ противоположной структуры света и тени в романе «Идиот» Ф.М. Достоевского  |
| A06 | ЦУКАДА Цутому  | Старообрядцы в годы войны в "Древлеправославный христианский (старообрядческий) календарь на 2023 год (украинская древлеправославная церковь) " |
| A07 | АОУДА Анна   | Трансформация символа медведя в романе Гаршина «Медведи» в контексте исследования животных  |
| A08 | ОТАНИ Рино   | Война и образы персонажей (на примере литературных произведений, изображающих Карафуто во время Советско-японской войны)                        |
| A09 | TSUTSUMI Yorika  | How Far Away Is Buzbulag? Leaving and Returning Home in Akram Aylisli's Works   |
| A10 | ГРЕЧКО Валерий   | Путевые очерки В. Шкловского: между приемом и фактографией  |
| A11 | САВРОВА Юлгуз  | Геопозитический символизм городов в историческом романе Зия Самеди "Тайна Годов": Перспектива уйгурского советского писателя                    |
| A12 | ОКУМУРА Фуминэ   | Мотивы музыкальных инструментов у Хлебникова  |
| A13 | ЛИ Бовэнь  | Четыре пространства и метафора «форс-мажор» в тексте «Петербург» Б. Пастернака  |
| A14 | ИВАМА Наруми   | Символика моря и глаз в поэтике И. Бродского  |
| B01 | IKEZAWA Takumi   | Metalinguistic Discourse on Ukrainian and Russian Languages in Ukrainian Social Media under the Ongoing War                                     |
| B02 | БОРИСОВА Анна  | Хронотоп М. М. Бахтина и его применение в прикладной лингвистике: Хронотопический анализ урока по русскому языку как иностранному               |
| C01 | ХИТОЦУЯНАГИ Фумико   | Современное состояние музыковедческих исследований в России и Японии: Пример проблемы цитирования «Dies irae» в произведении С.В.Рахманинова    |
| C02 | SUZUKI Yuuya   | The Process of the Architectural Design Competitions "The Palace of the Soviets" (1957) : Nikita Khrushchev as an "Architect"                   |
| C03 | SATO Hiromasa  | Why Is the "Severe Style" Reevaluated? Retrospective and Reception of the "Severe Style" in Recent Years  |
| C04 | МАЦУМОТО Акира   | Что означает понятие «современность»? Представление о Космосе в Центральной Азии в 1960 гг.   |
| C05 | ЁКОЯМА Аяка  | Ю. Любимов XXI века и поэзия: на примере спектакля «До и После (бриколаж)» (2003)   |
| W01 | Современная культурная ситуация в Украине, Беларуси и России (КИЁСАВА Сиори, ЮНОКИ Каори, ВАТАБЭ Наоя) |   |
- 

JASRL

October 2023

以下の研究報告要旨は著者に無断で  
引用できない。  
Not for quotation without the author's  
agreement.

【A01】旅における人間関係—ルーシ人旅行者によるカトリック教徒への対抗意識と友好感情

西角 美咲

本研究の目的は、異なる属性の人々同士が旅の中でどのような関係を築いたのかを、『ルーシの地の修道院長ダニールの聖者伝および巡礼記』（以下『ダニールの巡礼記』とする）と、『フィレンツェ公会議への旅』から明らかにすることである。旅の記録は、当時の世相や宗教的思想のみならず、実際の旅の様子を反映した、重要な文献である。旅人の行動を精査することで、信仰や時代潮流といった旅人の持つ社会的背景や旅という状況の特殊性をより深く、正確に理解できるようになる。

『ダニールの巡礼記』は、チェルニーゴフの修道院長と推定されるダニールが12世紀初頭に行った、エルサレム巡礼の記録である。『フィレンツェ公会議への旅』は、1438-1439年に開催されたフェラーラ＝フィレンツェ公会議へ、ルーシ側から参加した使節団の一員であったスーズダリ人（名は不詳）による、旅の道程の記録である。

両者の記録には、次の4つの共通点がある。第1に、記録者の属性である。両者とも、ルーシの地を故郷とする人間によって書かれた記録である。第2に、移動距離などの記録内の情報の正確性である。第3に、記録成立の歴史的背景における反カトリック的思想の存在である。第4に、こうした背景にもかかわらず、先行研究においては、記録内容から記録者の反カトリック感情が薄いと評価されていることである。

3点目と4点目の相反性について、これまでは記録者自身の「偏見のなさ」や、当時の思想が元来反カトリック的ではなかった、といった説明がなされてきた。しかしこの相反性を、人間性や時代性のみ帰する説明で片付けるのは、いささか早計である。なぜならこうした議論は、記録者の旅の中での実際の経験に、十分に目を向けていないからである。そこで本稿では、正教徒である二人の記録者が行った旅の内実に着目し、彼らがどのように他者、とりわけカトリック教徒と関わっていたのかを分析する。

分析の結果、旅の中での正教徒とカトリック教徒の関係性は、対象の文献において、2系統に分けられると判明した。第1に、自己と他者の差別化や他者への敵意といった形で表れる、「対抗意識」である。第2に、援助要請や歓待の受け入れ、功績の称賛といった形で表れる、「友好感情」である。つまり、旅という特殊な状況において、相反する対抗意識と友好感情は両立しうるのである。

(にしかど みさき、早稲田大学院生)

【A02】『左利き』における「交換」・「共同体」・「国家」

深瀧 雄太

『左利き』（Левша, 1881）は、19世紀ロシアの作家 H. C. レスコフ（1831-1895）の代表的な短編である。81年10月に新聞『ルーシ』で三度にわたり連載され、翌82年に単行本が出版された。この単行本の出版を受け、『左利き』に対するいくつかの書評が現れる。それらの書評は、「古い伝説に基づくという前書きの妥当性が疑わしい」（『声』誌書評）という作品の成立や形式面に触れたもののほか、作品の内容面に関して、「主人公（左利き）が環境に隷属するばかりで、発達した人間として描かれていない」ことを嘆いたり（『新時代』）、左派系の文壇から居場所を失ったレスコフの立場を念頭に、左利きが破滅するラストを欺瞞的な「リベラリズム」の表れだとして批判したり（『祖国雑記』）、あるいは『左利き』を西欧文明の影響を受けていないロシアの民衆を描いた作品と捉えていたりする（『ヨーロッパ報知』）。内容面を扱った書評に着目すると、概して「支配的な専制体制／抑圧される民衆」「親ロシア（右派）／親ヨーロッパ（左派）」「西欧近代／素朴なロシア」といった、二項対立的図式を背景に作品が読まれてきたことがうかがえる。そして、こうした図式に基づく読解はおそらく現在に至るまで続いている。

ところで、『左利き』を構成する重要な要素「鋼鉄の蚤」に関して、作中人物はこれを「贈り物」として（作中14章）、あるいは半ば商品として（3章）扱っている。この点を踏まえ、作中人物を通じて提示される価値観を経済的原理の観点から分析したとき、明快な二項対立では捉えきれない価値観を内包した作品像が浮かび上がる。

本発表では、主人公の左利きを中心に、各人物の言動に着目し、それらがいかなる価値観を示しているのかを分析する。分析に際しては、以下のような枠組みを設定する。(1)「交換的—非交換的」の軸。人物の言動が、相手の反応や返礼を期待したり、商品交換の関係を前提としたりするようなものであるか否か。(2)「人格的—非人格的」の軸。行為に際して、相手との人格的な関係を考慮に入れるか否か。この2つの軸を垂直に交差させ、4つの象限を設定したとき、「非交換的・非人格的」な行為（価値観）がありうるということ、またそれが、「皇帝と臣民」の信頼関係を内在化させた左利きを通じて示されている点が『左利き』の要諦であることを指摘したい。

(ふかたき ゆうた、京都大学院生)

## 【A03】ロシアの右派思想家による国外の思想の読解について

笹山 啓

1997年出版の、作家マムレーエフとその関係者らの小説・詩・評論が集められたアンソロジー『ユニオ・ミスチカ』には、思想家ドゥーギンによるマムレーエフ『存在の運命』の書評が収められている。報告者はかつて、1960年代にマムレーエフが試みたインド哲学読解の成果（著書『存在の運命』として結実）が、マムレーエフのソ連からの亡命後、彼がモスクワに残した非公式文化サークルの人間関係に加わったドゥーギンによって、ロシアという国家のアイデンティティを外的な圧力から保護するための議論として読み変えられたという主張をおこなった。マムレーエフもまた、晩年には非常に強い愛国思想をあらわにしていたことが知られているが、ここで浮上してくる問題は、たとえばインド哲学という異国の思想体系、あるいはドゥーギンであればさらに「伝統主義」や「保守革命」といったヨーロッパの思想運動を、それぞれの思想家が受容した末に、その成果をロシアのナショナリズムへと接続したことが、牽強付会な誤読であったのか、それともロシアという土壌から必然的に萌芽する創造的営為であったのか（あるいはその両方なのか）という点である。

同様の問題は、ドゥーギンがマムレーエフと同じように私淑し、その著書『聖なる狂気について』に前書きを寄せたこともある哲学者・フェミニストのゴリチェヴァについても提起できる。先行研究による指摘どおりゴリチェヴァは、ソ連におけるフェミニズムの運動を先導した人物のひとりだが、彼女のフェミニズム思想は正教との関係を抜きに語るができず、ここにも、外来の思想をロシアの土壌に適した形へ改良していくという傾向が見られる。ゴリチェヴァはドゥーギンとの関係について「(女性に関する考え方は)まるで違う」とするインタビューで述べているが、彼女の思想のそうした特徴がドゥーギンをひきつけたことは間違いないだろう。

近年その強烈な保守思想が日本でも注目され始めたドゥーギンであるが、本発表では彼の思想がマムレーエフやゴリチェヴァといった先行世代の思想との共鳴において生まれたものであるという仮説を基に、マムレーエフ『存在の運命』、ゴリチェヴァとマムレーエフの共著『新しき町キーテジ』、ドゥーギン『保守革命』などの著作を解説する。

(ささやま ひろし、富山大学)

## 【A04】スラヴ問題をめぐるドストエフスキーとホミャコフの対話：『作家の日記』における詩「鷲」の引喩を例に

町田 航大

ドストエフスキーとスラヴ派を代表する哲学者ホミャコフとの間の思想的類縁性はしばしば論じられてきた。1860年代に自身が刊行した雑誌『時代』では、この作家は自らの土壌主義の立場からスラヴ派を批判していたのに対し、1870年代には一転してスラヴ派への同調を明白に表明したという見方が一般的である。特に彼の評論『作家の日記』には、正教をロシアの独自性の基盤として尊重する姿勢や、カトリック批判、オスマン帝国支配下のスラヴ諸民族を救う使命がロシアにあるというメシア意識など、ホミャコフが言語化したスラヴ派の価値観との共通点が多く指摘されている。

しかし、思想の内容のレベルでの比較が盛んな一方、ドストエフスキーがホミャコフの言葉を具体的にどのように用いているかを吟味することは十分になされていない。特に注目すべきはホミャコフの詩の引用・引喩である。ホミャコフは自らの思想の表現のために詩を書き、『作家の日記』にはそうした彼の詩の引用や引喩が豊富に見られるが、先行研究はこれを、ドストエフスキーがスラヴ問題などを論じる上で効果的な語彙やモチーフをホミャコフの詩から素直に借用したものとみなしている。だが、近年特に指摘されているように、ドストエフスキーによる他者の言葉の使用は、引用元への単純な同意とは異なる複雑な性格を有している。『作家の日記』に引かれたホミャコフの詩の言葉も、この作家自身の文脈の中で意味づけ直され、独自の変化を施されている。またそこには、同時代のロシアにおいてホミャコフと彼の詩がいかに関わりを受けていたかという問題も介在している。ホミャコフの詩の引用・引喩を通じてドストエフスキーが行ったのは、この詩人および彼を取り巻く言論との論争的な対話である。

以上の認識にもとづき、本報告では『作家の日記』におけるホミャコフとの「対話」を具体的に検討するため、彼の詩「鷲」«Орел» (1832?) の引喩に着目する。この詩はスラヴ諸民族の自己意識の高揚に大きな影響を与えた詩として知られた一方、この詩に表れたようなスラヴ人を救うロシアの使命の訴えは汎スラヴ主義的な言説として警戒されていた。ドストエフスキーはスラヴ問題に触れる際、あえてこの危うい言説を引き、自らの発話に活用した。こうした側面を掘り下げること、この作家とスラヴ派の思想家の関係性をより緻密に検証することが狙いである。

(まちだ こうだい、早稲田大学院生)

【A05】ドストエフスキーの小説『白痴』における明暗の対立構造の分析

清水 真伍

本発表では、ドストエフスキーの小説『白痴』の二人のヒロイン、アグラヤとナスターシャ・フィリーポヴナの「美」を「明るさ」、「暗さ」、そして「コントラスト」をキーワードに分析し、そのダイナミズムを明らかにすることを目的とする。

『白痴』には「美」を象徴する人物としてアグラヤとナスターシャ・フィリーポヴナの二人のヒロインが登場するが、彼女らはそれぞれ「明るさ」と「暗さ」を象徴している。アグラヤの名前は「輝き」を意味するギリシア語の *ἀγλαΐα* に由来し、彼女自身「光」、「灯台」、「曙光」に喩えられる。一方、ナスターシャ・フィリーポヴナの描写においては「黒い」、「暗い」の語彙が多用される。このことからアグラヤは「明るさ」を、ナスターシャ・フィリーポヴナは「暗さ」を象徴する人物であるように思われる。

しかし、ミュシキン公爵がナスターシャ・フィリーポヴナの内面的な苦悩を看破したときには彼女の眼は「燃えるよう」と表現され、彼女の美しさは「眩い美」と表現される。またアグラヤは物語が進行するにつれ、内面的な不安から「陰鬱」になっていく様子が描かれる。

このようにアグラヤとナスターシャ・フィリーポヴナはそれぞれ一見「明るさ」と「暗さ」を象徴しながら、彼女たちの内面的な性質はその外面的な印象を裏切って現れ、彼女たちの「美」はそれぞれ「明るさ」と「暗さ」のコントラストを抱えたものとなっている。

ドストエフスキー作品における「美」の表象の研究では H. B. カシーナの研究のように「外面的な美」と「内面的な美」の二項対立が導入される傾向があり、「明るさ」と「暗さ」は視覚的なものであるため、「外面的な美」の一要素として解釈されがちである。

しかし既に見たように、アグラヤとナスターシャ・フィリーポヴナはそれぞれ「明るさ」と「暗さ」を基本的イメージとして持ちながら、内面的な状態の反映として正反対の側面を見せる。このように「明るさ」や「暗さ」は『白痴』において外面的な要素である一方、「外面的な美」と「内面的な美」を繋ぐ要素でもある。

「明るさ」や「暗さ」の一面ではなく、「明るさ」と「暗さ」のコントラストに焦点を当ててヒロインたちにおける「美」の表象を分析することで、本発表では、「内面的な美」も含めた彼女たちの「美」の流動的な性質、ダイナミズムを明らかにすることを旨とする。

(しみず しんご、東京大学院生)

【A06】『2023年古正教教会カレンダー（ウクライナ古正教会）』にみる戦時下の古儀式派

塚田 力

正教古儀式派の諸教会においては、主流派正教会と同様に、信徒の日常的な祈祷や齋戒を支えるため、教会カレンダーの出版が行われてきた。

古儀式派諸教会の教会カレンダーは1905年以降、公然と発行されるようになった。一部の教派はソ連期も発行を継続していたが、スターリン憲法の記念日が盛り込まれた例などもあり、古儀式派のカレンダーもその時代ごとの政教関係を反映してきたといえる。現在も世界各地で、ある程度の財政基盤が確立している教会ではそれぞれのカレンダーを発行している。

発表者は2022年に全ウクライナ及びキエフ総主教区（ウクライナ古正教会）が出版した卓上版及び壁掛版の『2023年古正教会キリスト教（古儀式派）カレンダー [Древлеправославный христианский (старообрядческий) календарь на 2023 год]』を入手した。

ベロクリニツキー派はウクライナの正教古儀式派における最大教派である。同派のウクライナにおける信徒数は10～20万人程度という推計がある。ロシア正教古儀式派教会に所属し、モスクワ府主教座の管轄下におかれてきた。

しかし、2022年2月のロシアによるウクライナ信仰によりモスクワ府主教座との関係は破綻し、4月には独立正教会の地位をモスクワ府主教座に要求した。11月には外国から完全に独立した『ウクライナ古正教会』としての宗教法人登録を行った。しかし、教会法上の地位はいまだに定まっていない状態だとする見方もある。

ウクライナの正教古儀式派の近年の動向に関しては阪本秀昭、通史としては C. タラネツ、オデッサ地域については A. プリガーリンならびに O. ルニョーヴァによる先行研究がある。本報告ではこれらの先行研究を踏まえ、他教派のカレンダーとの比較を行いつつ、このカレンダーを通して戦時下のウクライナの古儀式派教会の政教関係と宗教生活を紹介し、古儀式派のカレンダー文化について考察したい。

(つかだ つとむ、海上保安大学院校)

**【A07】ガルシンの『熊』に見られる熊表象の変容：アニマル・スタディーズの視座からの考察**

粟生田 杏奈

本報告ではフセーヴォロド・ガルシンの小説作品『熊』を、人間と動物の関係を探求する学問として注目される「アニマル・スタディーズ」の視点に基づいて分析を行い、本作品が従来の熊表象作品とどのような点で一線を画しているのかについて考察を行う。

ガルシンの『熊』は1883年に発表された作品であり、熊を用いた芸でロシア各地において人気を博していた旅芸人集団「ロマ」を主役に据えている。作中でロマたちは「熊の芸」を禁止する法律が公布されたために、期日までに熊を処分しなければならなくなる。ロマたちは別れの宴会を開き、熊との別れを惜しむが、結末で熊は悲劇的な運命を辿る。

本作品が執筆された背景には、1866年にロシア動物保護協会によって発布された「熊の芸に関する勅令」がある。19世紀に入ると欧米諸国で「動物愛護」の概念が重要視されるようになり、ロシアにおいても1866年に「熊の芸に関する勅令」が発布され、熊を使った娯楽の廃止が決定した。しかしこの法律に対しては批判の声も上がり、哲学者ロザノフは「度の過ぎた啓蒙主義的な法整備は、かえって人間と自然との間にある隔たりを深刻なものにする」と主張した。ガルシンも同様に、『熊』における悲劇を通して、動物保護の機運が高まる中で急進的な法整備の在り方に疑問を投げかけたのである。

ガルシンの『熊』はガルシン作品の中でも日本においては知名度が低い。J. コストローはロシア帝政末期における熊と人の関わりを主題とした文学作品を研究するにあたり、本作品を紹介しているが、物語全体における詳細な分析は行っていない。しかし本作品における熊の描写の特殊性を理解するためにも、物語全体の精読研究は必要だと考える。

熊が登場する作品自体は19世紀前半より存在していたが、その多くが民話や童話を踏襲した形式で描かれており、熊のキャラクターは道化役として滑稽な役回りを演じることが多かった。対して、ガルシンの『熊』は人間社会との関係性の中で熊の姿を捉え、熊を通じて近代社会の歪みや価値観の変容を描写しようと試みている。熊を社会との関係性の中で捉えようとした点で、ガルシンの『熊』は動物表象を用いた物語において革新的であると言えるだろう。人と動物の関係性を研究する学問分野である「アニマル・スタディーズ」の知見を活用して本作品を分析し、近代化に伴うロシア文学の動物表現の変化について考察したい。

(あおうだ あんな、東京外国語大学院生)

**【A08】戦争と人物表象—日ソ戦期の樺太を描いた文学作品を例に—**

大谷 梨乃

1945年8月の日ソ戦時、樺太(南サハリン)でも大規模な戦闘が行われた。この出来事について、歴史研究の分野では日本とロシア(ソ連)の史料比較がすすんでおり、その際、戦争を経験した元住民や元兵士の証言が参照されることも多い。一方、文学研究の分野では、日本文学とロシア文学の双方において、樺太戦での出来事や日ソ戦期の樺太(南サハリン)の様子を描いた作品とりわけ小説はほとんど注視されず、比較研究も行われてこなかった。しかしながら文学作品からも、戦争の相手国の人々すなわち他者に対してどのような目を向けていたかを読み取ることができる。文学作品とりわけ小説作品を通して、双方の戦争認識のみならず、登場人物の心情や描写などから互いの表象のあり方についても示唆を得ることができるだろう。

本発表では、日ソ戦期から戦後数年の樺太(南サハリン)を舞台にしたロシア文学と日本文学の小説作品を読み解き、そこに描かれる戦争認識や人物表象を比較する。ロシア文学では、この戦争は南サハリンを解放して取り戻すための「正当な」戦いとして、実際にそれを遂げた兵士は英雄のように描かれる。ロシア人から見て日本人兵士は狡猾で残忍な「サムライ」として描かれる一方で、文学作品上でソ連兵が一般市民に危害を加えることはなく、むしろ市民に同情のまなざしを向けていることもある。特に日本人女性の描写については、可憐さや美しさが強調され、過度に理想化されていることも多い。また、コリアンや先住民については、日本の支配下から解放されたいと願っている存在として描かれやすい。一方で日本文学ではこの戦争は専ら悲劇として描かれており、ロシア人とりわけソ連兵は「玉音放送後にもかかわらず攻めてきた」人々であり、それに対する理不尽さが強調されることが多い。

以上のように、同じ戦争を描いた文学作品であったとしても、それぞれ異なる戦争認識や人物表象が見られるが、それぞれに敵ひいては他者へのまなざしがあることは共通している。同じ対象を題材とした文学作品を比較することで、双方の戦争認識や互いの表象について理解することはもとより、ステレオタイプが形成されたり再生産されたりする過程についても再考する。

(おおたに りの、北海道大学院生)

【A09】 ブズブラークまでの距離：アクラム・アイリスリの創作における出郷と帰郷

堤 縁華

本発表は、アゼルバイジャンの代表的な作家アクラム・アイリスリ (Əkrəm Əylisli; Акрам Айлисли, 1937-) の創作における出郷と帰郷のダイナミクスを通して、作家の故郷観の一端を明らかにするものである。アイリスリはアゼルバイジャンの農村を題材とした作品で知られており、故郷の村落「アイリス」にちなんで「アイリスリ」というペンネームにもあらわれているように、故郷の問題を創作の軸としている。アイリスリの作品の多くは、作家の故郷と重ねられることもある「ブズブラーク (Buzbulaq; Бузбулак)」という架空の村落を舞台としており、ブズブラークの人や自然を主題とした作品群は、「ブズブラーク・サーガ」であると言える。

ブズブラークや故郷回帰の主題は、故郷愛や祖国愛を表現するものとして評価されてきた。アイリスリが生まれた土地とのつながりを重視していることは疑いない一方、ブズブラーク・サーガが帰郷だけでなく出郷にも決定づけられており、時に作中で故郷に対するアンビバレントな心情が提示されていることは、十分に検討されていない。ロシアを中心とした農村派文学同様、ブズブラーク像は首都バクーとの対比や、登場人物の出郷や帰郷の過程で明確化される。そして、ブズブラーク・サーガ自体、作家がアイリス、バクーやモスクワを行き来し、内外から故郷を捉える中で生まれたものである。

本発表では、出郷者の故郷に対するジレンマという、農村派的な創作の系譜に内在する問題から出発し、ブズブラーク・サーガを紐解く。具体的には、まず、初期から後期の作品における「故郷-首都」間の運動を概観し、時には救済となり、時には幻滅に至る多様な出郷/帰郷のシナリオを確認する。次に、ブズブラークや村人の特徴についての言及に富んだ中編小説『葬式のルポルタージュ (Yas yerindən reportaj; Репортаж с поминок)』(1977年執筆)に焦点を当て、出郷者の視点から描かれるブズブラーク像とその意義を考察する。分析の過程では、アゼルバイジャンにおける批評のほか、K. Parthéの著作をはじめとする、ロシアの農村派文学に関する議論も参照する。ブズブラークの主題は、アイリスリの創作の根幹をなす問題であり、ロシア以外のソ連構成国における農村派的な創作についても示唆を与えるものである。

(つつみ よりか、東京大学院生)

【A10】 Путевые очерки В. Шкловского: между приемом и фактографией

ГРЕЧКО Валерий

Виктор Шкловский известен как один из создателей теории формализма и автор концепции «приема» как одной из важнейших конструктивных составляющих искусства. Однако в 1920-е годы его концепция претерпела существенные изменения. О причинах этой эволюции можно спорить, но несомненным является то, что Шкловский, как и другие писатели и критики того времени, находился под воздействием силового поля власти, которая недвусмысленно задавала приоритеты на большую социальную ангажированность литературы и сближение ее с реальностью новой жизни.

В этом контексте нужно рассматривать и участие Шкловского в дискуссии об отходе от «деланности» литературы и смещения ее в сторону непосредственной «фактологичности», развернувшейся на страницах ЛЕФа и других изданий. Хотя Шкловский в своих официальных выступлениях находился в русле тенденции, подчеркивающей значение «литературы факта», практика его литературного творчества заставляет думать, что его отношение к этому вопросу не было столь однозначным.

В представленном докладе будет прослежено, как принципы «литературы факта» реализовывались Шкловским в его путевых очерках конца 1920-х – начала 1930-х годов. Будет продемонстрировано, как в результате сложного взаимодействия в них достигается баланс между прямой фактографией, элементами официального дискурса и характерными для Шкловского художественными «приемами».

(グレチュコ ヴァレリー、東京大学)

**【A11】 Геопозитический символизм городов в историческом романе Зия Самеди "Тайна Годов": Перспектива уйгурского советского писателя САВРОВА Юлтуз**

Since the early 20th century, the Soviet Union actively pursued various strategies to expand its influence in the Sino-Soviet border region. During this process, Uyghur cities served as geopolitical centers, commercial trade hubs, transportation nodes, and cultural centers. However, their central role in the expansion of the Soviet Union presents an ambivalent function. On one hand, they maintain political and economic connections with the Soviet Union, thereby creating opportunities for their own development. On the other hand, this development occurs within a complex web of economic and political dependencies. This study focuses on the canonized historical novel "The Mystery of the Years" in Soviet literature, written by a prominent Uyghur Soviet writer, Ziya Samedi. His work provides a unique perspective on the geopoetic symbolism of cities within the Uyghur Soviet experience.

The novel depicts the well-known Uyghur national uprising "Ghoja Niyaz Uprising," which occurred from 1931 to 1937. The narrative begins in Shanghai, a modern city known as the "window to the world," and subsequently unfolds in a series of historical Uyghur cities: Komul, a border city with borders to the Chinese interior provinces; Ürümqi, a young capital since 1884; Kashkar, the Uyghur cultural center; and finally Ghulja, the former capital occupied by the Russian Tsar from 1871 to 1881.

In "The Mystery of the Years" Ziya Samadi portrays Uyghur cities as victims of power struggles between the Soviet Union and China. The consequences of this competition include economic monopolies, population migration, and social dislocation. As a result, the Uyghur cities gradually fell under the process of "Sovietization." Moreover, Ziya Samedi illustrates multinational cultures constructed by diverse immigrants. The Uyghur cities are characterized by a rich urban culture, where Muslim, foreign, and colonial cultures coexist and intermingle, resulting in a dynamic cultural fusion.

(サフロワ ユルトゥズ、ベルリン・フンボルト大学)

**【A12】 フレーブニコフの作品における楽器のモチーフ**

奥村 文音

フレーブニコフの宇宙は1つの生命体として律動し、そこには無限に細胞分裂を続けるかのようなミクロコスモスが内包される。このような世界観自体はなにもフレーブニコフ一人に限ったものではなく、とりわけロシア・アヴァンギャルドにおける「有機的文化」とかかわりのある芸術家・思想家たちのなかには、こうした思想傾向を抱いていた者は少なくない。例えば「有機的文化」の中心人物であったミハイル・マチューシンや、その流れを汲む芸術家たちは、ストイックなまでにそのような宇宙の営みに同化しようと試み、またそこにこそ芸術活動の意義を見出していた。

だが、そうした共通する傾向があるにもかかわらず、フレーブニコフの「律動する宇宙」に対する身の置き方は、マチューシンたちの場合とは少し異なっているように思われる。「時間の法則」探求の過程で、自らが予言した1917年の帝国崩壊（＝ロシア革命）が的中したとき、フレーブニコフは「地球のヴェリミール化」と書き記したが、彼にとって宇宙の根拠となるのは彼自身であるのだ。

そのような特権性に関連するモチーフの1つに、楽器があげられる。フレーブニコフの作品にはしばしば楽器のモチーフが登場するが、それらは時に、単に音楽を演奏する以上の機能を持つ。弦楽器であれ管楽器であれ、それを奏することは宇宙（世界）を生みだしそこに生命を与える行為となるのだ。ゆえに奏者は、その外側から箱庭のように宇宙を眺めているか、あるいは彼自身が宇宙を包括しているか、いずれにしても単に宇宙の一部とはならず、どこか特権的な立ち位置にいるような印象を与える。

本報告では複数の事例を通して、そのような「フレーブニコフの宇宙」と「フレーブニコフ」の関係について考察する。

(おくむら ふみね、東京外国語大学院生)



【A13】パステルナーク「ペテルブルク」における  
4つの空間と「不可抗力」の隠喩

李 博聞

本発表では、ボリス・パステルナークの第2詩集のタイトル『バリエール越え Поверх барьеров』(1916)の表現が出てくる詩「ペテルブルク Петербург」(1915)を取り上げ、そのテキストに反映されている4つの空間(地理的空間、知覚・想像の空間、歴史的な空間、間テキスト的な空間)のあいだの相互作用を分析し、この詩におけるピョートル大帝の「王の激怒」によって建設された首都の歴史的なイメージと、プーシキン『青銅の騎士』における洪水のイメージと共に構築されたペテルブルクの都市像を明らかにして、そこに示唆されているパステルナークの創作における「不可抗力」の隠喩を探求することを目指す。

ロシア帝国の首都「ペテルブルク」は、モスクワを拠点にするパステルナークにとって異郷であり、書簡で「自らを抒情の対象に投げ込む際限なき内容」と呼んだことからもうかがわれるように、詩学的な靈感を与えてくれる都市だった。「ペテルブルク」は都市として、パステルナークの詩学に全般的な影響を与えたが、とくに本詩のテキストに表れている「水」のモチーフは、梶山祐治氏が指摘した通り、「スチヒーヤおよび創作行為の象徴」であり、パステルナークの詩学における重要な概念「不可抗力」を示唆している。

発表は主に4つの部分から構成される。まず、「ペテルブルク」に提示されているナルヴァ広場からオフトア河という、地図で特定できる地理的空間と、波・雲・運河・小艇等の物体の相対的な位置によって構成される知覚の空間を分析し、異郷からの来訪者であるパステルナークによる都市空間の認識を明らかにする。次に、パステルナークが想像したピョートル大帝の都市建設のシーンに着目し、「王の激怒」の下に構築された都市の歴史的な空間を分析する。そして、悪天候・洪水・ピョートル銅像など諸形象に示唆されている、プーシキンの長詩『青銅の騎士』との間テキスト性を整理して、「洪水」のスチヒーヤ的な力に支配されるペテルブルクの空間像を解明する。最後に、上記4つの空間に対する分析をまとめた上で、本詩におけるパステルナークのペテルブルク都市像を整理し、4つの空間の軸である「不可抗力」の隠喩を考察する。以上の過程によって、パステルナーク詩学における空間的想像力のパターンを明らかにし、そこに示唆されている「不可抗力」の内容と意義を具体的に示す。

(リ ボヴェン、京都大学院生)

【A14】ブロツキイにおける「海」と「目」の象徴性について

岩間 成美

本発表では、ソ連期の詩人ヨシフ・ブロツキイの代表作の一つである1975年の詩「ケープ・コッドの子守唄 (Колыбельная Трескового Мыса)」を中心に、主に前半期に創作されたブロツキイの詩作品を対象とする。「ケープ・コッドの子守唄」は彼の亡命体験を反映しアメリカ合衆国を描いた作品として重要視されており、同時に、「空間」や「時間」の問題や詩作の問題がかなりの程度直接的に扱われていることから、1975年時点のブロツキイの詩学を考える上で非常に重要な作品である。

ブロツキイ作品において「海」や「目」は頻出のモチーフであり、ブロツキイの詩学の根幹をなす彼独特の「空間」や「時間」の概念とも極めて密接に関わり合っている。彼の詩学においては「時間」が「空間」に優越しており「時間」は「空間」についての思考であることをブロツキイ自身が明言しているが、「海」は一貫して「時間」の領域を象徴的に表す。こうした「時間」と「空間」の問題は詩人の位相の問題とも不可分に結びついている。「海」(=「時間」)の領域は1960年代の作品においては「死」の領域と重なっており、そこで「死」と直結した「時間」の領域は、生きた詩人には到達不可能なものとして描かれている。

しかし、「ケープ・コッドの子守唄」に至って「海」は単に「死」の領域のみを指すモチーフではなくなり、それ以前のブロツキイにおける「海」とは異なる象徴性を帯びるようになっていく。そして「海」の象徴性が変化することによって、必然的に詩人の在り方や詩作の営為にも変化が生じる。そこで重要な役割を担うのが「目」のモチーフである。「ケープ・コッドの子守唄」やその後のブロツキイ作品においては、「目」のモチーフが極めて独特の性質を帯びることによって「海」(=「時間」)と詩人の関係に大きな変化が生じている。

このように、ブロツキイ作品における「海」や「目」のモチーフに注目することによって、彼の詩学における詩人の在り方や詩作の営為を考えることが可能になる。そこで本発表においては「ケープ・コッドの子守唄」を中心とする諸作品のテキスト分析を行い、彼の詩学における「海」や「目」の象徴性を検討するとともに、「海」と「目」のモチーフの用いられ方の変遷を分析することを通してブロツキイの詩学に生じる変化を明らかにすることを目指す。

(いわま なるみ、京都大学院生)

## 【B01】戦時下ウクライナのSNSにおけるウクライナ語・ロシア語に関するメタ言語的言説

池澤 匠

ウクライナでは憲法上唯一の国家語であるウクライナ語に加え、歴史的経緯からロシア語が広く用いられており、1991年の独立以降、同国の言語政策はウクライナ語振興とロシア語公用語化の間で揺れていた。2013年に「尊厳革命」が始まり、翌年にロシアによるクリミア併合ならびに東部における武力衝突が起きると、2018年に「国家語としてのウクライナ語の機能保全に関する法律」が制定され、公共の場ではウクライナ語の使用が原則義務付けられるなど、同語による単一言語主義に舵が切られている。各種世論調査ではウクライナ語の使用拡大とロシア語の使用縮小が報告されているが、特にロシアがウクライナに対する全面的侵攻を開始した2022年2月以降は、この傾向がより顕著に表れている。

ロシア政府は「ロシア語話者の保護」を侵攻の事由の1つとしており、これに対する反動として現在のウクライナでは急速な言語的「ウクライナ化」が生じている。メディアではロシア語のコンテンツが減少しており、市民の間では対面およびオンラインでウクライナ語の講座が開かれている。このような状況下で、ロシア語を国家としてのロシアに結びつけ、ウクライナ語を更に広める必要性を強調する言説が広く展開されている。特にTwitter・Facebookなどといったソーシャル・メディアは言語選択に関する問題提起ならびに議論の場となっており、これらのプラットフォームのアカウントやグループはロシア語からウクライナ語への「切り替え」を呼びかけている。更にはウクライナの政府機関の公式アカウントが明示的にロシア語に対する否定的な態度を表明する場合もあり、インターネットにおける言語問題の議論は官民の双方を巻き込んでいる。

本報告は社会言語学的観点から、現在のウクライナにおけるウクライナ語に対する肯定的評価、ならびにロシア語に対する否定的評価が、如何にソーシャル・メディアで形作られているかを考察する。具体的にはウクライナ語とロシア語に関する投稿やコメントを取り上げることで、戦時下における両語のメタ言語的言説、即ち情報空間で流布・共有されるウクライナ語とロシア語に関連づけられる概念や主観的価値の分析を行う。考証では特に軍事侵攻の最中で起きている出来事が如何にSNS上で見られる2つの言語に対する評価に反映されるかに焦点を当てる。

(いけざわ たくみ、東京大学院生)

## 【B02】Хронотоп М. М. Бахтина и его применение в прикладной лингвистике: Хронотопический анализ урока по русскому языку как иностранному

БОРИСОВА Анна

В докладе будут освещены вопросы, связанные с применением понятия хронотопа М. М. Бахтина в прикладной лингвистике, и представлены результаты хронотопического анализа урока по русскому языку как иностранному в японском университете. Понятие хронотопа, предложенное М. М. Бахтиным для анализа художественных произведений (Бахтин, 1975), вышло за пределы литературоведения и активно используется в психологии (Леонтьев, 2008), социологии (Шавердо, 2021) и социолингвистике (Kroon & Swanenberg, 2019), однако в прикладной лингвистике его начали применять не так давно. В ряде исследований понятие хронотопа используется для анализа взаимодействия учащихся в классе (Brown & Renshaw, 2006). Хронотопический подход позволяет рассматривать взаимодействие в классе с точки зрения языковой и материально пространственной составляющей (дискурс, движения учащихся, физическое пространство класса) (Ligorio & Ritella, 2010). Понятие хронотопа включает в себя материальные, социальные и семиотические аспекты времени-пространства, что делает его подходящим инструментом для всестороннего исследования и концептуализации взаимодействия в классе.

Данные собраны в ходе полевого исследования, проведенного в течение 2018–2022 учебного года в одном из государственных университетов Японии. Данные включают в себя аудио- и видеозаписи диалогов учащихся и их письменные работы. Диалоги студентов были проанализированы с помощью метода дискурс-анализа, чтобы определить, как выражается восприятие студентами пространственно-временной организации урока в различных дискурсивных практиках.

Применение понятия хронотопа в качестве аналитического инструмента позволяет рассмотреть взаимодействие студентов во время работы в классе с точки зрения их прошлого опыта, настоящих событий и пространства, в котором они находятся. Анализ показал, какие хронотопы пересекаются во время групповой работы в классе, и позволил рассмотреть феномен совместной работы комплексно и в динамической связи с ее практическими результатами.

(ボリスワ アンナ、大阪大学院生)

【C01】ロシアに於ける音楽学研究の現在と日本の現状—ラフマーニノフ作品に於ける「Dies irae」引用問題を例に

一柳 富美子

本発表はロシア音楽研究の最前線を報告するもので、大きく2つに分かれる。前半はロシアの現状について。長引くロシア・ウクライナ紛争下で、国際交流の減少による悪影響がロシア国内の音楽学や演奏界にはっきりと出ている。発表者は、本年3月末にモスクワで開催された国際シンポジウムに对面参加、さらには6月後半のチャイコフスキ国際コンクールも現地取材して、芸術音楽分野でロシアが抱える問題を目の当たりにした。音楽学の最新成果に関しては、刊行中の特定作曲家作品全集の実態、特に全150巻完結を推進している「ショスタコーヴィチ新作品集」と2023年の二重記念年を機に出版開始された「ラフマーニノフ・ピアノ音楽新全集」の欠陥を取り上げる。

後半は、日本国内のラフマーニノフ研究の現状のうち、安易に語られる引用問題を詳解する。音楽の引用問題は非常に複雑かつ重要であるが、軽々に誤解がSNSなどで発信され、時には書籍化までされている。従って本発表では、引用問題の導入として先ず「ソドレミ」モチーフを紹介する。「ソドレミ」は偶発性の高い音列であるにも拘わらず、その歴史も理論も無視して、この音列を特定音楽作品の引用だと誤解釈するケースが後を絶たない好例だからである。

ラフマーニノフの場合、引用で注目されるのは1) グレゴリオ聖歌の〈Dies irae (怒りの日)〉2) 鐘の音3) 正教会旋法の3つである。これらについてロシアでの一般議論に触れた後、特に1)の〈怒りの日〉に焦点を当て、内外の誤解例を広範に拾い上げて、どのように論じられているか、なぜ引用と判断できないか等を分析する。対象作品は、《死者たちの島》、《鐘》他を予定している。日本では、〈怒りの日〉第1連8音列のうちの最初の4音「ドシドラ」だけで引用と判断されるケースが圧倒的に多いが、このモチーフも偶発性が高く、決して引用とは言えない。本発表は、音楽専門外の研究者にとっても、芸術音楽を理解・鑑賞する上で極めて有益であると思われる。なお、〈怒りの日〉引用問題の箇所は、2023年3月30-31日にГИИ主催ロシアナショナル音楽博物館にて開催されたМеждународный научный симпозиум «С. В. Рахманинов и его эпоха»で発表済みの内容を、日本国内用に大幅加筆したことを予めお断りしておく。

(ひとつやなぎ ふみこ、昭和音楽大学)

【C02】《ソヴィエト宮殿》建築競技設計(1957)に至るまで:「建築家」としてのニキータ・フルシチョフ

鈴木 佑也

報告副題にある「建築家」とは建築物を考案しその配置などを計画/設計する専門職ではなく政治家であるフルシチョフが自称したものに過ぎない。だがこの点は看過できない。彼が主導して1950年代半ばから大量生産型集合住宅(団地)が建設されたことを考慮する必要があるからだ。またO.ヤクシェンコが指摘するようにフルシチョフの第一書記在位期において建築関連の雑誌や機関の名称では「建設」が加わるようになり、芸術美学的側面が強い「建築を建設が追いやり、建築はその地位を失った」。こうしたことを鑑みると、彼が自称する「建築家」とは自らの指揮のもと建築分野に何らかの形で介入し変化を生じさせる建築分野における総合プロデューサーのようなものと言える。

一方で《ソヴィエト宮殿》は1930年代に一大国家事業として計画/実施され、1941年から建設作業が凍結し頓挫した建築プロジェクトである(以下「かつてのソヴィエト宮殿」とする)。しかし1956年の第20回ソ連共産党大会秘密報告において新たなものとしてこの建築プロジェクトは再び企画された(以下「フルシチョフ期のソヴィエト宮殿」)。P.リゾンなどの先行研究では、フルシチョフ期のソヴィエト宮殿における競技設計で提出された設計案のほとんどは、モダニズム建築の特徴を備えたもので、当時の建築潮流を反映させたものであると紹介するとどまっている。だがこの建築プロジェクトが再開されるまでの経緯に関してほぼ言及されてこなかった。

本報告ではこうしたフルシチョフ期のソヴィエト宮殿を解明するための一端として、その競技設計実施に至るまでの経緯を扱う。その中で、1.かつての《ソヴィエト宮殿》と異なった特徴あるいは共通点、2.フルシチョフら当時の政府指導部によるこの建築プロジェクトへの参与の度合い、3.企画段階で参考とされた他の建築物、4.競技設計実施に際して注力された点に着目する。特に2に関しては、「建築家」と自称する政府指導者が深く関与していたとなると、例外的に建築分野にはあまり関与をしなかったかつての指導者スターリンと大きく異なる様相をこの建築プロジェクトは帯びることとなる。この点を含めた上記4点をアーカイブ資料に立脚して分析し、企画段階で目指されていたフルシチョフ期の《ソヴィエト宮殿》の方向性を本報告では明らかにしたい。

(すずき ゆうや、新潟国際情報大学)

【C03】なぜ「シビア・スタイル」は再評価されているのか？：「シビア・スタイル」の近年の回顧（展）と受容

佐藤 大雅

美術批評家アレクサンドル・カメンスキー（Александр Каменский, 1922-1992）による命名をもって、ソ連絵画史及び社会主義リアリズム絵画の文脈における絵画様式のひとつとして認知された「シビア・スタイル（суровый стиль、「厳格な様式」という和訳もあり）」は、1950～1970年代のソ連美術を代表する潮流として広く知られている。アンドロノフ（Н. Андронов, 1929-1998）オッソーフスキー（П. Оссовский, 1925-2015）、コールジェフ（Г. Коржев, 1925-2012）、サラホフ（Т. Салахов, 1928-2021）、ニコノフ（П. Никонов, 1930-）、ポプコフ（В. Попков, 1932-1974）らに代表される「シビア・スタイル」の画家たちは、従前の社会主義リアリズム絵画のイデオロギー的規範から逸脱するような表現を志向した。具体的には、理想主義的なソ連市民像を描き出そうとする社会主義リアリズム絵画から、本来の意味での「リアリズム」的絵画、即ちありのままの素朴な市民像を表象する傾向を強めていった。このような志向性により、「ロバの尻尾」事件でも知られる「モスクワ画家同盟30周年展覧会（30 лет МОСХ）」（1962）においては、フルシチョフによる批判的となっている。

斯様な経緯から、当該様式が「非公式芸術」と紹介されることがある。一方、当該様式を代表するとされる画家の多くが、ソ連芸術アカデミーの会員等であった事実を鑑み、当該様式は、「公式芸術」の範疇に組み込まれたものであると捉えるのが妥当である。近年では、回顧展の開催等によって「シビア・スタイル」及び当該様式を代表する画家たちに焦点が当てられる機会が増え、関連論文の刊行数も増加傾向にある。これらの論文では、「近年の再評価の高まり」という主旨の記述も見受けられる。しかしながら、上記の事実を踏まえて、果たしてソ連時代において、もとより「シビア・スタイル」は評価に乏しかったと言えるのだろうか。

本発表では、当該様式が近年になって「再評価」されていると捉える言説を批判的に検討すると共に、ソ連時代から現在までにおける「シビア・スタイル」を巡る言説の変容を辿りつつ、現時点での近年の「再評価」の動向について総括する。

（さとう ひろまさ、法政大学院生）

【C04】「現代性」とは何か：1960年代中央アジアの宇宙表象

松元 晶

本報告では、宇宙表象をテーマに1960年代中央アジアの「現代性」を明らかにする。宇宙計画、とりわけガガーリンの宇宙飛行がもたらすソ連文化への現代性を概観しながら、同時代の中央アジアの視覚表象にどのような影響をもたらしたのか分析し、宇宙計画と民族的アイデンティティがどのように関連していたのかについて考察する。1960年代の中央アジア表象は、ソ連社会で形成された現代イメージと民族アイデンティティのバランスをとりながら、自民族の優位性を示すものが数多く見られた。これまで「未開」とされた中央アジアの伝統や景観のイメージが、否定的なものから中立的になったことで、それらのイメージが民族のアイデンティティを表すこととなった。一方で、社会主義によって発展した中央アジアの姿も同時に描かれ、1960年代の中央アジア文化にとって現代性と民族性の両立が大きなテーマとなった。中央アジアの現代的イメージは、都市部の景観やジェンダー観、身体表象など様々な分野で見られる。その中でも、ガガーリンの宇宙飛行は社会的/文化的にも当時の現代性を形作るうえで重要な出来事となった。

ガガーリンの宇宙飛行は、中央アジア文化人にも大きな影響を与えており、文学、絵画、映画を通じて様々な反応が見られる。中央アジアの文化人は宇宙の進歩的なイメージを積極的に表象することで、ソ連の偉業と自民族を関わらせ、文化的ヒエラルキーの下層とされた中央アジアの文化/民族を引き上げることを目指した。本報告では、クルグズ子ども映画『宇宙飛行士通り』（マリアンナ・ロシャリ、1963）を中心に、中央アジア映画における宇宙表象を分析する。『宇宙飛行士通り』では、だれもが宇宙に関わることができるわけではなく、イメージの担い手が重要であったことを示唆している。宇宙飛行の成功という実際の歴史は、ソ連中央が望むようにソ連と中央アジアが一体となって、ソ連の功績を称えることができる記憶であった一方で、宇宙のイメージは厳格に管理された。宇宙を描く際は、ソ連の功績に注目しつつ、中央アジアは功績の周縁であることを同時に描く必要がある。中央アジア文化人の作品は常に中央とのバランスが求められたのである。

※本報告は北海道大学DX博士人材フェローシップの助成を受けたものである。

（まつもと あきら、北海道大学院生）

【C05】21世紀のリュビーモフと詩：『以前と以後  
(ブリコラージュ)』(2003)を中心に

横山 綾香

ユーリー・リュビーモフは、1964年から2011年までモスクワのタガンカ劇場の芸術監督を務めた演出家で、歌の挿入や非写実的な舞台美術・衣装といった前衛的な手法を得意とした。ソ連時代は社会主義体制の矛盾を題材とした作品を数多く発表し、モスクワで最も注目される演出家の1人となった。

既存の戯曲を上演することは稀であり、多くの作品で小説や詩といったロシア文学を自ら脚色していた。なかでも独創的なのは「詩的演目」(Поэтическое представление)とリュビーモフが銘打った作品群である。「詩的演目」では俳優は実在の詩人を演じ、本人として詩や手記などを朗読し、彼らが生きた時代の雰囲気表現する。構成はおおむね時系列に沿ってはいるが、一貫したストーリーは備えていない。1960年代に頻りに制作され、その後、政府の指示で新たな「詩的演目」の制作が難しい状況になっても、73年と81年には新作が上演された。

84年にリュビーモフは国外追放処分を遭う。ソ連崩壊後にタガンカ劇場に復帰するが、社会主義体制の矛盾という題材を失った結果、低迷期に陥った。しかし、90年代末から再び評価され始め、2003年に銀の時代の詩人・作家たちのテキストを組み合わせた演目『以前と以後』(До и После)を発表した。詩を全面に出した作品の上演は約20年ぶりであった。本作をソ連時代の「詩的演目」の復活と捉えた者は少なくないが、リュビーモフ自身はこの作品を「ブリコラージュ」であると強調している。

たしかに、両者とも俳優が詩人を演じ、詩や詩人に関連するテキストで構成された作品であるが、ソ連時代の「詩的演目」は原則として1人の詩人を題材としていたのに対して、『以前と以後』では23名の詩人・作家のテキストが使われた。それぞれ引用される分量には差があるが、主人公と見なせる登場人物は存在しない。また、詩人をはじめとする実在の人物だけではなく、ブロークの戯曲『見世物小屋』のキャラクターも登場し、詩人と同様に銀の時代の詩を朗読する。ここに挙げた以外にも相違点は数多く見受けられた。

本報告では、90年代末に始まる再評価の過程やソ連崩壊に伴う創作環境の変化に触れながら、ソ連時代の「詩的演目」との相違点を軸に『以前と以後』の分析を行い、社会主義体制の矛盾という題材を失ったリュビーモフが何を新たなテーマとしたのか考える。

(よこやま あやか、東京外国語大学院生)

【W01】ロシア周辺における現在の文化的状況について

【全体の趣旨】

本ワークショップは、ロシア周辺における現在の文化的状況について、多角的な視点から考察を図るものである。近年の戦争により、ウクライナではロシアに対する敵対心が急激に高まり、ロシア語や「ロシア文化」を忌避する動きも活発化している。一方で、ベラルーシも含めた東スラヴ地域において、歴史的に共通の起源を持ち、今日に至るまで受け継がれてきた文化が存在するのも事実である。そのため、例えば「ロシア文化」とはそもそも何であるのかという問いでさえ、明確な回答を得るのは決して容易ではない。本ワークショップではこうした問題について、各発表者の専門分野における知見に基づき、言語と芸術、およびそれらをめぐる政策や社会の動きを取り上げながら議論を行う。

【全体の構成と各発表の要旨】

1. 「ベラルーシ語とウクライナ語の書記体系の発展をめぐる最新動向」

清沢紫織 (北海学園大学)

ベラルーシ語及びウクライナ語の書記体系の形成に関わる問題は、その背景にある言語イデオロギーと密接に相関する政治権力(オーストリア・ハンガリー帝国とロシア帝国、ソヴィエト政権と独立政権など)や宗教勢力(正教とカトリック教など)の価値観や影響力を象徴的に可視化するため、標準語史、さらには歴史研究や政治研究などにおいてもしばしば注目されてきた。本報告では、こうした書記体系形成の歴史的背景を踏まえつつベラルーシ語とウクライナ語の書記体系の発展をめぐる最新動向について紹介する。具体的には、ベラルーシにおいては2020年の政権への大規模抗議活動以降の社会情勢の変化、ウクライナにおいては2022年の戦争以降の社会情勢の変化をそれぞれ踏まえながら、ベラルーシ語およびウクライナ語それぞれの表記における文字と正書法の最新の有り様について考察する。

2. 「伝統文化の現在—ロシアとウクライナを比較する」

柚木かおり (立命館大学)

現在の旧ソ連圏の文化を理解しようとする、文化全体の大きな転換点となった1930年代の第二次五ヶ年計画による民族文化の規格統一化に突き当たり、当時の文化政策を精査する必要に迫られる。その際、ロシアの場合、こと伝統を軸に考えると、実は国の圧倒的多数を占める肝心のロシア人の文化自体が自縄自縛の憂き目に遭っており、後世の政策施行の外の人たちがその解消の克服に尽力するという事例に行きつくこともある。民俗バラライカの演奏文化がその好例である。

本報告では、ウクライナの国民的楽器であるバンドゥーラとその前身のコブザの演奏文化を取り上げ、とられた政策と実態、現状を現地協力者の力も借りながら概観する。バラライカとの比較において差異と共通点を指摘し、両国の文化の特性と伝統文化の持つ生命力を描き出したい。

3. 「ウクライナにおける言語をめぐる」  
渡部直也（東京大学）

2022年2月のロシアによる全面侵攻以降、ウクライナではロシア語の地位が急速に低下し、ロシア語話者がウクライナ語使用に切り替える事例も広く観察される。概して東部・南部ではロシア語を母語とする住民が多いと言われてきたが、ウクライナ語教育は受けており、社会調査でもウクライナ語とロシア語のいずれも運用可能と回答する者が多数派である。両言語はともに東スラヴ語群に属し系統的に近いものの、音韻および語彙の側面で大きな違いがあるとされる。一方で、実際の言語運用においては互いに近い語彙を用いることもあり、場合によっては「スルジク」と呼ばれる混成言語が使われることもある。本発表では、いわゆる標準的規範と異なる両言語の運用について、事例を挙げながら考察する。

## 日本ロシア文学会活動記録 (2022～2023)

### 1. 2022年度(第72回)大会

第72回定例総会・研究発表会は2022年10月22日(土)、10月23日(日)の両日、専修大学神田キャンパス(大会会場)とオンライン(Zoom)にて、ハイブリッド方式で開催された。

これにともない理事会は10月22日(土)に、各種委員会は10月23日(日)に個別に開かれた。また日本ロシア文学会大賞授賞式が総会中に行われ(ハイブリッド開催)、受賞記念講演録画はYouTube上で一般公開されている。懇親会は、コロナ禍により不開催であった。

10月22日(土)

午前 開会式、研究発表会

午後 研究発表会、定例総会

10月23日(日)

午前 研究発表会

### 2. 研究発表会内容

研究発表

#### 第1会場

10月22日(土)午前(ブロック①)

〔司会〕鳥山裕介、飯田梅子

A01 平嶋寛大：Я.Б.クニャジニョンの喜劇『変人たち』における自由思想

A02 安島里奈：フォードル・ソログープ『小悪魔』における芳香

A03 中澤佳陽子：ツルゲーネフの『足れり』における時間的遠近法

10月22日(土)午前(ブロック④)

〔司会〕高柳聡子、武田昭文

A06 金丸駿：リアノゾヴォにおけるコンクリート・ポエトリー再考—イーゴリ・ホーリン『地球が死んだ』をめぐって

A07 プロホロフ・マリア：リノール・ゴラーリクの戦争小説—非人間化と擬生物化を通して見えるもの—

10月22日(土)午後(ブロック⑦)

〔司会〕南平かおり、大森雅子

A09 濱田 玲央：ゴリキー『チェルカッシ』の海を中心とした自然描写の研究

A10 田村太：サヴィンコフ／ロープシンの初期創作を読む

10月23日(日)午前(ブロック⑩)

〔司会〕越野剛〔討論者〕沼野恭子、安達大輔

W02 宮風耕治、原田義也、大森雅子、大野齊子：文学史から考えるウクライナとロシア

#### 第2会場

10月22日(土)午前(ブロック②)

〔司会〕前田和泉、宇佐見森吉

A04 李博聞：初期パステルナークの創作における象徴主義的な側面：パステルナーク「二月」とアンネンスキー「黒い春」の比較研究

A05 沖隼斗：ボリス・ポプラフスキイ「冬の日 動きのない空で…」をめぐって—雪の時空間と移動の問題

10月22日(土)午前(ブロック⑤)

〔司会〕長谷川章、イリーナ・メーリニコワ

C03 小川佐和子：ロシア文学と新派映画—トルストイ『復活』の映画化を中心に

C04 福岡加容：映画「惑星ソラリス」(1972)の「他者」とクリスの再生について

10月22日(土)午後(ブロック⑧)

〔司会〕伊東一郎、中村唯史

A11 大野齊子：『ミルゴロド』におけるウクライナをめぐるゴーゴリの歴史認識

A12 上村正之：『エネイダ』から『タラス・ブーリバ』へ：詩学とナショナリズムの関係

10月23日(日)午後(ブロック⑪)

〔司会・コーディネーター〕澤田和彦

W03 長興進、澤田和彦、塚本善也、吉見薫：安井亮平=ボリス・エゴロフ往復書簡(1974-2018年)について

#### 第3会場

10月22日(土)午前(ブロック③)

〔司会〕楯岡求美、伊藤愉

C01 岩原宏子：ロシア人形劇の歴史におけるペトルーシカ人形劇の役割—イワン・ザイツェフ、ニーナ・シモノービッチ=エフィーモワ、イワン・エフィーモフの活動を例に—

C02 横山綾香：ユーリー・リュビーモフ演出『聞いてくれ!』(1967)における詩人の役割

10月22日(土)午前(ブロック⑥)

〔司会〕古賀義顕

B01 渡部直也：ウクライナ語の母音高段化における数量的傾向

10月22日(土)午後(ブロック⑨)

〔司会・コーディネーター〕柚木かおり

W01 中堀正洋、熊野谷葉子、柚木かおり、Екатерина Дорохова：21世紀のロシア・フォークロア

#### 第8回日本ロシア文学会大賞受賞記念講演

10月22日(土)15:45-16:45 黒門ホール / Zoomハイブリッド配信(10月27日より録画がYouTubeで公開中)  
井上幸義：ゴーゴリの鏡の世界—『鼻』の中の鏡像

### 3. 総会議事録要旨(\*詳細な総会報告は会報53号記載)

2022年10月22日(土)16:50-18:10

- (1) 開会の辞 会長：中村唯史(敬称略、以下同様)
- (2) 学会賞表彰 【論文部門】畔柳千明  
【著書部門】古宮路子
- (3) 日本ロシア文学会大賞表彰 井上幸義
- (4) 若手ワークショップ企画表彰  
・ 受賞企画「ロシア・東欧におけるパストラルの諸相」(代表)五月女颯
- (5) 議長団選出：(関東)粕谷典子、(中部)齋須直人、(関西)堀口大樹
- (6) 事務局報告
- (7) 各種委員会報告
- (8) 日本ロシア文学会規定類訳ワーキンググループ報告
- (9) 他の学会活動報告  
・ JCREES 報告 2021年度 ICCEES への日本からの参加者数について
- (10) 2021/2022 会計年度決算および会計監査報告
- (11) 2022/2023 会計年度予算案
- (12) 総会議長団選出の手続きについて
- (13) 学会誌の掲載内容修正について

- (14) 支部の合同について
- (15) 地方支部規定及び役員選出規定の改定について
- (16) 2023年度全国大会について
- (17) 2022/2023年度役員・理事・各種委員一覧
- (18) その他
  - ・ 総会資料のペーパーレス化について
  - ・ ロシア文学会からの声明発出について
- (19) 議長団解任・閉会の辞 副会長：前田和泉

#### 4. 会員異動（2022年8月～2023年7月）

##### ご逝去

井上徹様（関東東北）、田辺三千広様（関西中部）、  
徳永晴美様（関東東北）  
ご冥福をお祈りいたします

##### 退会（以下、敬称略）

青山太郎（関東東北）、有泉和子（関東東北）、  
岸本福子（関東東北）、佐藤祥子（関東東北）、  
藤井明子（関東東北）、ブリノフ・エフゲニー  
（関東東北）、八島雅彦（関東東北）

##### 入会（一般会員）

栗生田杏奈（あおうだ・あんな）（関東東北）、  
大谷梨乃（おおたに・りの）（北海道）、  
清水真伍（しみず・しんご）（関東東北）、  
中岩諒（なかいわ・りょう）（関東東北）、  
永田怜絵（ながた・さとえ）（関東東北）、  
西角美咲（にしかど・みさき）（関東東北）、  
ボルディロフスカヤ・アンナ（ぼるでいろふすかや・  
あんな）（関東東北）、  
町田航大（まちだ・こうだい）（関東東北）、  
松元晶（まつもと・あきら）（北海道）

##### 入会（学生会員）

栗原かおり（くりはら・かおり）（関東東北）、  
山田智子（やまだ・さとこ）（関東東北）

##### 賛助会費納入

NHK エデュケーション語学部、水声社、成文社、  
ナウカ・ジャパン、日ソ、日本ロシア語情報図書館、  
白水社、

##### 維持会費納入

岩浅武久、木村崇、国松夏紀、栗原成郎、  
坂庭淳史（2口）、佐藤昭裕（2口）、澤田和彦、  
中村唯史（2口）、中村泰朗



日本ロシア文学会  
2021/2022 会計年度決算報告(2021年9月1日～2022年8月31日)  
2022/2023 会計年度予算案(2022年9月1日～2023年8月31日)  
(2022年10月22日総会承認)

I 一般会計

収入の部	前年度予算 (2021/2022)	前年度決算 (2021/2022)	今年度予算 (2022/2023)	備考
前年度からの繰越金	¥7,612,245	¥7,612,245	¥8,639,859	
利息	15	16	16	
学会費	3,000,000	2,918,717	3,000,000	
入会金	10,000	9,000	10,000	
賛助会費	100,000	70,000	100,000	
雑収入(広告)	20,000	22,000	20,000	
特別収入	0	100,000	0	繰越金を除いた今年度収入：
合計	¥10,742,260	¥10,731,978	¥11,769,875	¥3,130,016

支出の部	前年度予算 (2021/2022)	前年度決算 (2021/2022)	今年度予算 (2022/2023)	備考
大会準備費	¥0	¥0	¥400,000	専修大学・ハイフレックス大会
学会誌制作費	950,000	753,705	950,000	
交通費	500,000	300,000	500,000	12月・7月対面理事会
事務委託料	550,000	610,962	670,000	シクミネット・勝美印刷併用 +会員検索機能オプション
事務費	20,000	42,025	20,000	
広報委員会	16,000	15,714	16,000	
マブリヤール会費	24,000	24,429	29,000	US\$1=¥145で想定
JCREES 会費	30,000	30,000	30,000	
学会賞・大賞	50,000	40,000	80,000	学会賞2名、大賞1名
通信費	10,000	14,350	15,000	
印刷費	200,000	255,934	260,000	大会資料集・会報印刷代
会合費	2,000	0	2,000	
事業費	50,000	5,000	50,000	
振替(特別会計へ)	0	0	0	
(小計)	¥2,402,000	¥2,092,119	¥3,022,000	
予備費	8,340,260	0	8,747,875	
次年度への繰越金		8,639,859		
合計	¥10,742,260	¥10,731,978	¥11,769,875	

## II 特別会計

収入の部	前年度予算 (2021/2022)	前年度決算 (2021/2022)	今年度予算 (2022/2023)	備考
振替(一般会計より)	¥0	¥0	¥0	
前年度からの繰越金	2,937,125	2,937,125	3,034,125	
ワークショップ返金	0	47,000	0	
維持会費	300,000	150,000	200,000	
利息	12	0	0	
合計	¥3,237,137	¥3,134,125	¥3,234,125	

支出の部	前年度予算 (2021/2022)	前年度決算 (2021/2022)	今年度予算 (2022/2023)	備考
事業費	¥250,000	¥100,000	¥250,000	国際交流・若手ワークショップ
学会参加者旅費補助	0	0	40,000	第72回大会実績
小計	¥250,000	¥100,000	¥290,000	
予備費	2,987,137	0	2,944,125	
次年度への繰越金		3,034,125		
合計	¥3,237,137	¥3,134,125	¥3,234,125	

(2022年監査報告 監事：村田真一(10月13日)、寒河江光徳(10月10日))

## 委員会活動記録

### ■ 日本ロシア文学会大賞選考委員会

野中 進

今年度の大賞選考の経緯については、2022年12月末時点で1件の推薦があった。本年3月7日、オンラインで大賞選考委員会を開催し、審議の末、大賞候補者として上田洋子氏（ロシア文学・演劇研究者、『ゲンロン』代表）を推挙することを決めた。委員会案は7月16日の理事会でも了承された。授賞理由については『ロシア語ロシア文学研究』55号をご覧ください。

### ■ 学会賞選考委員会

八木 君人

学会賞選考委員会は2022年12月から2023年6月にかけて選考作業を行った。2023年6月17日にweb会議システムを利用した選考委員会を開催し、審議の結果、著書部門は鈴木佑也『ソヴィエト宮殿——建設計画の誕生から頓挫まで』（水声社、2021年11月）、論文部門はマリア・プロホロワ「リノール・ゴラーリク『呼吸できるすべてのものたち』における動物表象の機能」（『ロシア語ロシア文学研究』第54号）に授賞することを決定した。選考過程、授賞理由などについて、詳しくは『ロシア語ロシア文学研究』第55号を参照されたい。

### ■ 学会誌編集委員会

坂庭 淳史

『ロシア語ロシア文学研究』55号（2023年10月刊行予定）の編集作業は、今のところ順調に進んでいる。学会誌54号については、22年12月に論文と書評をJ-STAGE (<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/yaar/list/-char/ja>)で、23年4月には54号全体を学会ホームページ上で公開した。55号についても刊行後、同様のスケジュールでの公開を予定している。現行体制2年目は、1年目の経験やいただいたご意見などを活かして、より円滑・柔軟に活動できたように思う。そして、ご協力いただいた多くの会員にお礼を申し上げる。

### ■ 広報委員会

本田 晃子

広報委員会では、引き続き学会ホームページおよび学会メーリングリストの管理・運営を行っています。ホームページについては、直近1年間で約126件（前年171件）の更新を行いました。メーリングリストによる学会からのお知らせについては、直近1年間で約135（前年124件）の配信を行いました。昨年学会ホームページをリニューアルしましたが、新ホームページについてのご意見・ご要望がありましたら、広報委員会までお知らせください。ご協力の程、何卒よろしくお願い申し上げます。

### ■ 国際交流委員会

武田 昭文

1. 「国際学会等での報告に関する助成」と「公開研究会・（ミニ）シンポジウム等の実施に関する助成」の申請を、2023年5月31日締切として募集した。居住国内での国際学会・研究会への参加にも対象を広げての公募だったが、新型コロナウイルス感染症の影響、そしてロシ

ア軍によるウクライナ侵攻の影響を受けて応募者はいなかった。今後、状況が改善され、再び交流が活発になることを期待して、来年度も本制度への助成金を継続することが理事会にて承認された。

2. 「国際参加枠」による海外からの報告者の申請を、6月25日締切として募集した。今年度は1名の応募者があり採用となった。

3. 海外で開かれる国際学会・シンポジウム・セミナー等の情報について、国際交流委員会もしくは広報委員会までお知らせいただきたい。

### ■ 社会連携委員会

鴻野 わか菜

社会連携委員会では、JCREES スラブ・ユーラシア研究サマースクール（2023年8月24日-25日 主催：JCREES、共催：北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター）の企画選考に関わりました。学部21名、修士11名、博士6名の応募がありました。ご協力ありがとうございました。また、本サマースクールには、例年、JCREES加盟学会より1名ずつ講師を派遣しています。今年は大西郁夫先生（北海道大学名誉教授）がお引き受けくださいました。

### ■ 倫理委員会

佐藤 千登勢

「『倫理委員会』に関する内規」第4条改訂について、2022年12月18日の理事会にて承認を受けた（2023/24年度総会での報告事項となる）。2022年12月改訂版は本学会ホームページに掲載されている。幸い、本年度も当委員会を発足させる事態は起こらなかった。

## 支部活動記録

### ■ 北海道支部

2023年度研究発表会・総会

(2023年7月1日(土)13:30～ 北海道大学, 対面・Zoomのハイフレックス開催)

◇研究発表会

大谷梨乃(北大院)「エドゥアルド・ヴェルキン『サハリン島』におけるサハリン」(司会:岩本和久)

菅井健太(北大)「在外ブルガリア系住民の言語維持についての一考察—LEI(Language Endangerment Index)を用いた分析—」(司会:清沢紫織)

岩原宏子(東海大学)「ヴェルテップ人形劇の伝統と現在—ロシアでのヴェルテップ劇の変遷についての考察—」(司会:安達大輔)

◇総会

議題:1. 2022年度活動報告(理事会、および北海道支部), 2. 2022年度会計報告, 3. 2023年度役員選出および支部運営委員他選出, 4. その他

◇運営委員会(2023年7月1日(土)12:00～ 北海道大学, 対面開催)

支部長:岩原宏子

事務局担当:菅井健太

事務局住所:060-0810 札幌市北区北10条西7丁目 北海道大学文学部 菅井研究室気付

Tel: 011-706-3050 E-mail: [ksugai@let.hokudai.ac.jp](mailto:ksugai@let.hokudai.ac.jp)

### ■ 関東東北支部

1. 『関東東北支部報』41号発行(2023年5月20日刊)

2. 2023年度研究発表会・総会(2023年6月3日(土)Zoomによるオンライン開催)

◇研究発表会

[修士論文成果報告]

・西角美咲(早大院)「巡礼における価値観の再認識と揺らぎ—『ルーシの地の修道院長ダニイルの聖者伝および巡礼記』を題材として—」(司会:伊東一郎)

・清水真伍(東大院)「ナスターシャ・フィリーポヴナの「美」の二重性—「世界をひっくり返す美」のダイナミズム—」(司会:番場俊)

・町田航大(早大院)「『カラマーズフの兄弟』における「キリストの発見」の意義—旧約聖書ヨブ記との構造的相関に着目して—」(司会:安岡治子)

・浜田誠太郎(早大院)「スタニスラフスキーの演技論における「体験」とヴィジュアル・イメージ」(司会:伊藤藤愉)

[博士論文成果報告]

・宮内拓也(東大)「ロシア語名詞句の統語構造と意味解釈:問題意識・到達点・残された課題について」(司会:秋山真一)

・畔柳千明(日本学術振興会特別研究員 PD)「ロシア帝国の国家事業としての北京宗教使節団(1715-1863)」(司会:澤田和彦)

・福井祐生(日本学術振興会特別研究員 PD)「ニコライ・フォードロフの思想の生成の諸相:そのキリスト教的基礎を中心に」(司会:小俣智史)

◇総会

①報告事項

・2022年度会計報告

・2022年度支部活動概要:『関東支部報』第40号の刊行、2022年6月4日に関東支部研究発表会・総会の開催、

### 第1回運営委員会

②審議事項

・関東東北支部選出理事候補選挙関連(選挙管理委員会の選出、選挙スケジュール、旧東北支部からの理事選出について、「連続三選禁止」実施に関する支部規定の修正)

3. 運営委員会(2023年3月30日Zoomによるオンライン開催)

・事務局長が八木君人(早稲田大学)から大森雅子(千葉大学)に変わり、事務局が千葉大学へ移転。

・関東東北支部運営委員会における旧東北支部のあり方について審議・検討した。

4. 今期の体制

支部長 沼野恭子

事務局長 大森雅子

事務局住所 〒263-8522 千葉県千葉市稲毛区弥生町1-33 千葉大学大森雅子研究室

([kanto.yaar@gmail.com](mailto:kanto.yaar@gmail.com))

2023年7月2日に行われた理事選の結果15名が選出され、メール審議の結果、次期支部長は楯岡求美に決まった。

### ■ 関西中部支部

1. 関西中部支部新支部長ならびに理事候補選挙(投票期間5月15日～5月28日, 電子投票/郵送)

2. 2023年度研究発表会・総会:2023年7月8日(土)大阪大学(対面)+オンライン(Zoom)によるハイブリッド開催

◇研究発表

・松山勝哉(神戸外大院)「A. クプリーンにおけるパリとモスクワ」(司会:清水俊行)

・木寺律子(京産)「『カラマーズフの兄弟』におけるサクランボのジャム」(司会:齋須直人)

・大平陽一氏(天理)「ロスマンのグラフィックデザイン:戦間期ブルノの機能主義」(司会:ヨコタ村上孝之)

◇総会

①[報告]関西支部・中部支部統合による運営委員会メンバーの変更 ②[報告]会員移動 ③[報告・審議]選挙管理委員より関西中部支部新支部長ならびに理事候補の選挙の結果報告・役員候補につき審議・承認 ④[審議]決算案と予算案を審議・承認 ⑤[審議]次期監事を審議・承認 ⑥[報告]会費・入会費の当面不徴収について ⑦[報告]2024年度研究発表会・総会当番校について(神戸市外国語大学・ハイブリッド開催)

◇今期体制

支部長:金子百合子

事務局長:藤原潤子

住所:651-2187 神戸市西区学園東町9-1 神戸市外国語大学藤原潤子研究室気付

E-mail: [junko@inst.kobe-cufs.ac.jp](mailto:junko@inst.kobe-cufs.ac.jp)

### ■ 西日本支部

会員間での日程調整がつかなかったため、2023年度研究発表会・総会は延期となった。現在のところ、2023年度後半に開催する予定である。

支部長・事務局長:佐藤正則 事務局住所:〒819-0395 福岡市西区元岡744 九州大学大学院言語文化研究院佐藤正則研究室気付

日本ロシア文学会 第73回大会資料集

2023年9月26日発行

発行者 日本ロシア文学会 中村唯史

〔書記〕

〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町1-8

大阪大学大学院人文学研究科

北井聡子研究室内

〔庶務会計〕

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1

上智大学外国語学部ロシア語学科

秋山真一研究室内

E-mail (共通) : [yaar@yaar.jpn.org](mailto:yaar@yaar.jpn.org)

URL: <http://yaar.jpn.org/>

〔大会組織委員会〕野中進（委員長）、石川達夫、伊藤愉、グレチュコ ヴァレリー、武田昭文、堀口大樹

〔大会実行委員会〕武田昭文（委員長）、北井聡子、齋須直人、笹山啓、高田映介、高橋沙奈美、松枝佳奈





## スラヴ百科事典 全3巻

Славянская энциклопедия. В 3 т.

М., Ин-т русской цивилизации. 2021. 2592 с  
スラヴ学の最新の成果を反映。 ¥54,450

## ラフマニノフ文献遺産 全3巻

Рахманинов С.В. – Литературное наследие. В 3 т.

М., Музыка. 2023. 1816 с. ¥35,310  
作曲家の回想、論文、インタビュー、書簡を収録。

## ロシアの文学博物館 百科事典

全2巻 第1巻: А-Л

Литературные музеи России. Энциклопедия. В 2 т. Т.1.

М., ГМИМЛИ. 2022. 638 с. ¥18,260  
国立ロシア文学史博物館の刊行。初の体系的記述。

## パステルナークの生涯と創作の記録

全3巻 第1巻 1889-1924年

Летопись жизни и творчества Пастернака. В 3 т. Т.1. 1889-1924.

М., Инфинитив: Лингвистика: Бослен. 2022.  
368 с. 継続予約をお勧めします。 ¥8,360

## ドストエフスキー語彙辞典

イディオグロッサリー 第5巻

Словарь языка Достоевского. Идиоглоссарий. Т.5 По-С.

М., ИРЯ РАН: Азбуковник. 2021. 1225 с.  
ヴィノグラードフ・ロシア語研究所編。 ¥16,500

## 日本詩歌大叢書 全8巻

Большая библиотека японской поэзии: в переводах Александра Долина. В 8 т.

М., Наука-Восточная литература. 2022. 3454 с.  
ドーリン教授訳。解説注解付。 ¥50,820

## ナウカ・ジャパン

店舗 10:00-19:00 (日曜・祝日休み)

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-34  
TEL 03-3219-0155, FAX 03-3219-0158  
book@naukajapan.jp  
https://www.naukajapan.jp

◆ソヴィエト連邦のシークレット・ウォー スターリンからゴルバチョフまで - Тайные войны СССР от Сталина до Горбачева: Главные документы и свидетельства. М.: Комсомольская Правда, 2022, 440 с. (R5192) 税込価格 ¥18,150

◆アレクサンドロフスキー: 新聞に見る20世紀後半から21世紀初頭ソヴィエト・ロシアの生活(全3巻) Александровский Ю. - Газетные страницы о нашей и моей жизни. В 3 томах. М.: Городец, 2021-2023. (R5004, R7646, R8610) 税込価格各 ¥15,400~ ¥18,700

◆在外ロシア画家辞典(第一および第二波亡命) 全2巻 - Художники русского зарубежья. Первая и вторая волна эмиграции: Биографический словарь. В 2 томах. СПб.: Издательский дом Мирь, 2019, 1580 с. (Q8053) 税込価格 ¥27,500

◆ベレリムテル編: 子どもと大人のためのコルネイ・チュコフスキー アルバム 34×26cm Перельмутер В. - Корней Чуковский для детей и взрослых. Альбом. М.: Рутения, 2020, 600 с. (R5030) 税込価格 ¥22,000

◆ロシア文学記念館百科(全2巻) 第1巻 А - Л. - Литературные музеи России: энциклопедия: в 2 томах. Том 1. А - Л. М.: ГМИРПИ имени В. И. Даля, 2022, 638 с. (R7655) 税込価格 ¥17,600

◆ボンダーリ他: ロシアで生活するためのロシア語 練習問題 (B1水準) Бондарь Н., Лутин С., Кряхтунова О. - Учимся жить в России: Тесты. Контрольные работы. (B1). QR. М.: Русский язык. Курсы, 2022, 132 с. (R6710) 税込価格 ¥3,740

◆デーメネヴァ: ストーリーテリングの要素をともなった会話上達用教科書 Деменева К. А. - Расскажи историю: Учебное пособие по развитию речи с элементами сторителлинга. (B1). М.: Русский язык. Курсы, 2022, 160 с. (R6712) 税込価格 ¥4,620

◆ちょっと話せますか? ロシア語教程での対話とモノローグのための視覚刺激 (A1-B1水準) О.Н. Гусева, Т.А. Каргы - А поговорить? Выпуск 1. Визуальные стимулы для диалогов и монологов на уроке русского языка. (A1-B1). СПб.: Златоуст, 2022, 200 с. (R6810) 税込価格 ¥4,620

◆六か国語対訳ビジュアル辞典(ウクライナ・英・独・仏・西・露語) 2万1000語 28x22cm - Візуальний словник. Шість європейських мов. Київ: Ірпінь, 2008, 1120 с. (R6762) 税込価格 ¥22,000

◆夢野久作: ドグラ・マグラ Юэнэ К. - Догра Магра. Перевод Анны Слащёвой. СПб.: Издательство книжного магазина "Желтый двор", 2023, 550 с. (R8308) 税込価格 ¥8,580

◆日本詩歌大文庫(全8巻) アレクサンドル・ドーリン訳 - Большая библиотека японской поэзии: в переводах Александра Долина. В 8 томах. М.: Наука; Восточная литература, 2022, 3454 с. (R7521) 税込価格 ¥44,000

◆ミハイル・ガスパーロフ著作集 全6巻 Гаспаров М. - Собрание сочинений в 6 томах. М.: Новое литературное обозрение, 2021-2023. (R1290, R2162, R6928, R6929, R7188, R7188) 税込価格各 ¥6,820~ ¥9,460

日ソのホームページ(<http://www.nisso.net>)ではロシアの新刊書、新聞・雑誌、美術アルバムのコーナーの他に、約80,000点のロシアの書籍のキーワード検索が可能です

(株)日ソ

東京・大阪・モスクワ

〒113-0033 東京都文京区本郷3-15-4本郷小林ビル  
Tel.03-3811-6481 Fax03-3811-5160  
E-Mail: [nisso@nisso.net](mailto:nisso@nisso.net)